

# 大学生の英語授業と英語学習に関する意識調査

A Survey on University Students' Consciousness on English Classes and Learning

Kyo Otani, Makiko Mieuli

大谷 杏・ミューリ 真貴子

## 要旨

本研究では、英語教育改革以前に入学した大学生に対しアンケート調査を行い、これまでの英語の学習状況、授業環境や教材、授業外での学びの状況を把握し、今後の英語教育への指針を得ることを目的とした。結果、学生は大学の英語教育の中で現在最も不得意としている「話す」の能力を高めたいと考えていること、約半数に継続的、若しくは自主的に英語を勉強したいという意思があることが明らかとなった。しかし、個人が求めるレベルや将来的な英語使用の希望には違いが見られたことから、コミュニケーションを重視しつつも、画一的ではなく、より学生個人のニーズに沿った形での英語教育が望まれる。

キーワード: 英語教育、大学生、4技能、資格、意識

Keywords: English education, university student, four skills, qualification, consciousness

## 1. はじめに

2020年度は小学校から学習指導要領の改訂が実施され、大学入試共通テストが導入されるなど、日本の教育において大きな改革が行われた年であった<sup>(1)</sup>。学習指導要領の改革により、小学校において中学年で「外国語活動」が、高学年で「外国語科」が新たに導入された<sup>(2)</sup>。また、高等学校では「聞くこと」「読むこと」「話すこと〔やり取り・発表〕」「書くこと」の力をバランスよく育成するための科目として「英語コミュニケーションⅠ、Ⅱ、Ⅲ」や、発信力の強化に特化した科目である「論理・表現Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」が新設される<sup>(3)</sup>。大学入学共通テストでは、これまで出題されてきた発音、アクセント、語句整序などを単独で扱う問題がなくなり、リーディングとリスニングの配点が均等になった<sup>(4)</sup>。一方で、令和3年度から運用開始予定であった大学入試英語成績提供システムの導入が見送られる<sup>(5)</sup>など混乱を極めている。

本稿は、このような変革や混乱を前に、大学生の英語学習状況や英語に対する意識や、全学を対象

としたアンケート項目にはない授業評価に関わる事柄を把握するための調査し、その結果から、今後の英語教育の方向性を検討していくことを目的とする。質問項目を大分すると、1. これまでの英語の学習状況、2. 授業環境等に関すること、3. 教材に関すること、4. 授業外での学びや目標に関することとなる。

大学生を対象とした英語授業関連のアンケート調査は、太田（2014）、古家・櫻井（2014）、児島・齋藤（2016）、屋島（2020）などをはじめ、これまで様々な研究者によって行われてきた。調査対象者別、特定の意識別では、リメディアル教育を必要とする学生を対象とした牧野・平野（2015）、海外での学修に対する意識を調査した草山・吉田（2019）などがある。このような意識調査では、大学や学生の所属、設定した質問項目により、回答も千差万別となる。そのため、今回の質問項目の設定は独自に行った。

## 2. 調査の概要

調査実施日は2020年1月22～24日、調査対象者は関西地方の公立大学に通う1年生配当の後学期必修英語科目を履修した4クラスの学生（計120名）である。調査を行った2019年度は1年次のみ英語が必修であり、クラス分けの措置が採られていなかったため、学生はそれぞれ入学時に振り分けられたクラスで履修していた。質問1で尋ねた調査対象者の属性は、地域経営学科1年生85名（全体の71%）、地域経営学科2年生以上7名（6%）、医療福祉経営学科1年生27名（22%）、医療福祉経営学科2年生以上1名（1%）であった。

## 3. 各項目の調査結果

### 3.1 これまでの英語の学習状況

質問2から質問5では、これまでの英語学習状況について尋ねている。図1の「英語は好きですか」の問いに対し、「好き」と「まあまあ好き」を選んだ学生が全体の54名（46%）、「あまり好きではない」「嫌い」が36名（30%）、「どちらとも言えない」が29名（24%）であったことから、英語に対して「好き」「まあまあ好き」という意識を持っている学生が全体の半数近くを占める一方で、3割の学生が「あまり好きではない」「嫌い」と感じていることが分かる。

図2は英語の4技能（読む、書く、聴く、話す）の得意、不得意を5択（「得意」「どちらかと言えば得意」「どちらとも言えない」「どちらかと言えば不得意」「不得意」）の中からそれぞれ回答する形式を採った。「読む」は、「得意」が4名、「どちらかと言えば得意」が53名で全体の48%を占めているのに対し、その割合は「書く」「聴く」「話す」にしたがって減少傾向にあり、「話す」では「得意」と「どちらかと言えば得意」の合計が僅か9名（8%）となっている。一方、「どちらかと言えば不得意」「不得意」を選んだ学生が「読む」では39名（33%）であったのに対し、「書く」「聴く」「話す」にしたがって増加し、「話す」では71名（59%）となっている。これらの結果に基づいて学生が

得意としている英語の4技能を順に並べると、「読む→書く→聴く→話す」となり、とりわけ「読む」と他の3技能との乖離が顕著であることがわかる。

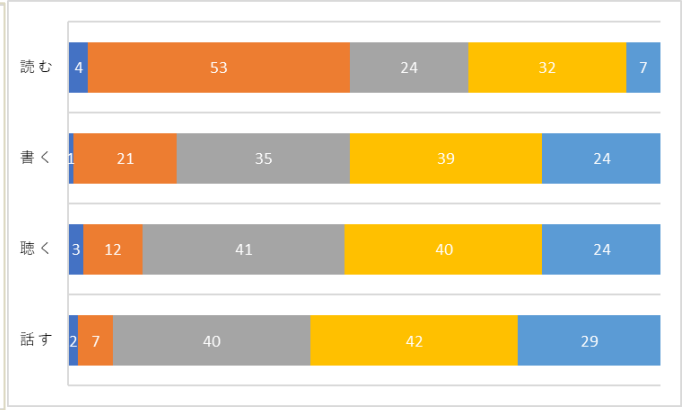
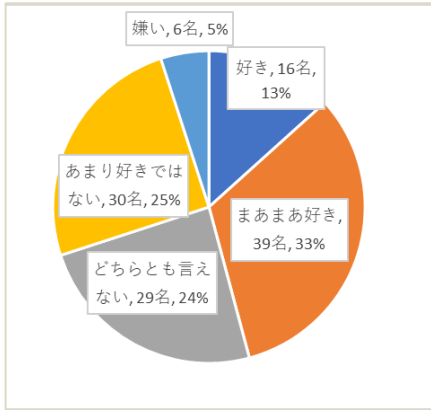


図1 英語は好きですか

図2 英語の4技能の得意、不得意について

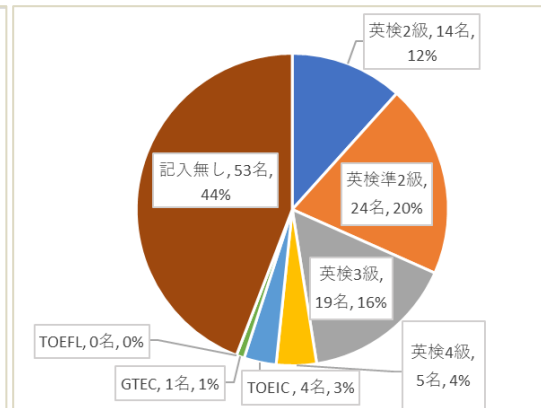
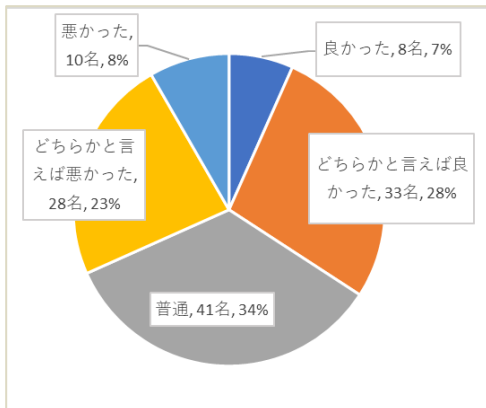


図3 高校までの成績 (自己評価)

図4 所持している英語資格 (自己最高のもの)

図3は、英語の高校までの成績を5段階の自己評価で各自回答してもらったものである。「良かった」「どちらかと言えば良かった」を選んだ学生の合計が41名(35%)、「普通」が41名(34%)、「どちらかと言えば悪かった」「悪かった」が38名(33%)と、その3者がほぼ均等に存在していることが分かる。図4では、現在までの間に取得している英語関連資格のうち、最も高い級やスコアを「英検」、「TOEIC」、「TOEFL」、「その他」の項目を設け、それぞれ記載してもらった。結果、「記入無し」が最多の53名(全体の44%)であり、半数近くの学生がこれまで英語関連資格を全く取得してこなかったことがわかる。資格別では「英検準2級」が24名(20%)と最も多く、「英検3級」19名(16%)、「英検2級」(14名、12%)と続くことから、英検を基準にするならば、本学の学生の平

均的なレベルとして準2級を想定することができる。3名ではあったが、受験したことのある資格にTOEIC（400点、450点）やGTEC（言語別部門120点）と答えた学生もいた。

### 3.2 授業環境等に関すること

質問6から質問11は学習環境に関する質問である。先述した通り、今回の調査協力者120名は、それぞれ1クラスあたり32～38名の教室で学んでいた。テキストにはリスニングやDVDの箇所が含まれていたため、全てのクラスが毎回パソコンルームで授業を行った。テキストの詳細については後述するが、CEFRのB1レベル相当のテキスト（全80ページ）のうち、English IIでは28～44ページを学習した。教員は、状況に応じて英語と日本語を混ぜて授業を行い、テキストの指示によっては適宜ペアワークの時間を設けた。テキストへの理解を助けるため、単語リストや各種プリント、小テストを作成・実施し、課題提出などの宿題も課した。

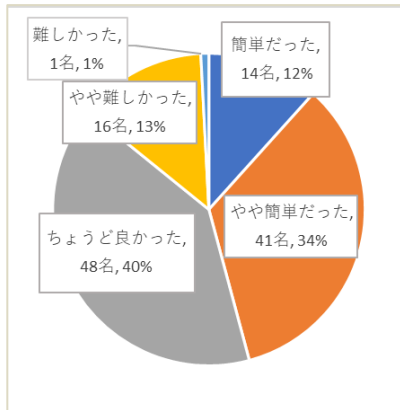


図5 学習内容のレベル

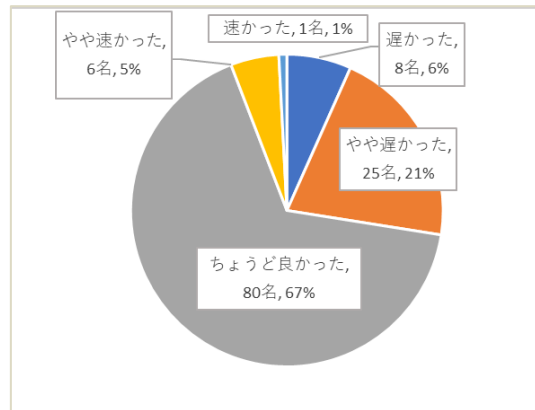


図6 授業の進捗

図5は、学習内容のレベルが自分に合っていたか否かを尋ねたものである。そのためか、「ちょうど良かった」48名（40%）と回答した学生が最も多かったが、「やや簡単だった」41名（34%）と「簡単だった」14名（12%）の合計も全体の46%を占めていることから、難易度は適正からやや簡単という評価であった。但し、当該科目では、学年共通問題の期末テストに対応するため、また時間の都合上、テキストのライティング、スピーキング、リスニングの一部を省いていたこともあり、B1レベルのテキストを全てテキスト通りに行った訳ではない。図6は、授業の進捗について尋ねた結果である。「ちょうど良かった」と回答した学生が80名（67%）で最も多く、次いで「やや遅かった」25名（21%）、「遅かった」8名（6%）が計27%であったことから、授業進捗は概ね適正であったと考えられる。

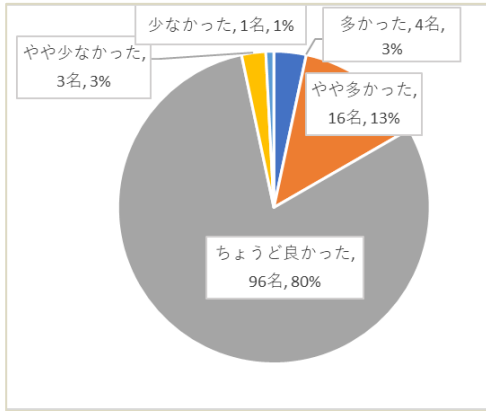


図7 1クラスの人数

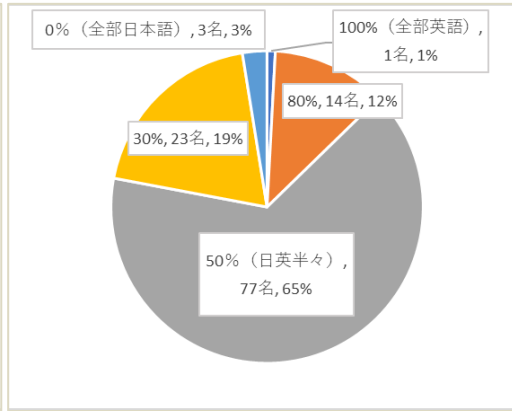


図8 教員の英語使用

図7は、1クラスの人数について尋ねたものである。「ちょうど良かった」と回答した学生が96名(80%)を占め、32~38名のクラス編成は概ね良好であったことが窺える。また、教員の英語使用(図8)については、教員の英語使用の割合を50%(日英半々)が最も良いとした学生が全体の77名(65%)を占めており、30%とした学生も23名(19%)と、全て英語による授業を希望した学生は全体のわずか1名(1%)に過ぎなかった。学習内容のレベルを「ちょうど良い」から「やや簡単」とした学生が全体の46%であった(図5)一方で、授業を全て英語で行うことに大部分の学生が否定的であった(図8)背景には、学生が持つ4技能間の能力差や得意・不得意が関係していると考えられる。すなわち、4技能のうち、学生が不得意とする、教員の話英語で聴きとり、英語で正確に応答する「聴く」「話す」ことには助けが必要という結果となった。

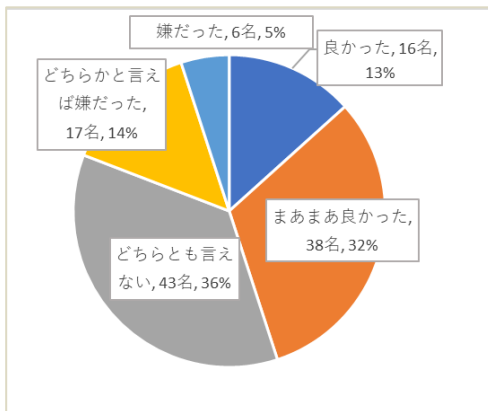


図9 ペアワークについて

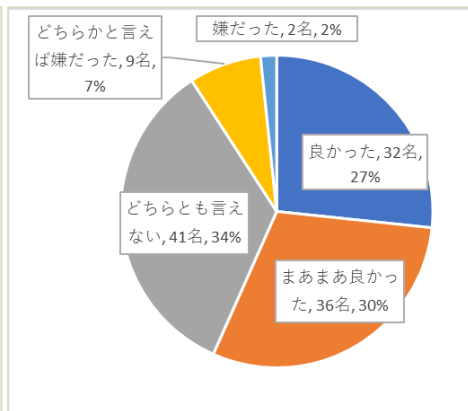


図10 パソコンルームでの授業について

図9は授業内で採用したペアワークについての感想である。「どちらとも言えない」が43名(36%)で最も多く、「まあまあ良かった」38名(32%)と「良かった」16名(13%)で45%という結果で

あったため、どちらかと言えば好意的に受け取られていたのではないかと考えられる。しかし、「どちらかと言えば嫌だった」「嫌だった」と回答した学生も全体の 19%存在するため、ペアワークの在り方については、ワーク自体がきちんと機能しているのか否かも含めて検討の余地はあるであろう。図 10 のパソコンルームでの授業の良し悪しを尋ねる質問では、「どちらとも言えない」が最も多く 41 名 (34%) であったが、「まあまあ良かった」と「良かった」で全体の 57%を占めることから、パソコンルームでの授業はどちらかと言えば好評であったようである。

### 3.3 教材に関すること

質問 12 から質問 15 では、テキストについて質問した。English I (前学期)・II (後学期) の 4 クラスで使用したテキストは、外国の出版社が刊行した、全文英語で書かれた CEFR の B1 レベル相当の教材であった。カラー写真が多く掲載され、外国に関する生の知識が得られること、また 4 技能の学習が可能との判断から選定に至った。1 ページが左右 2 段組になっており、それぞれの段はページによって異なるが、45～50 字×おおよそ 50 行である。

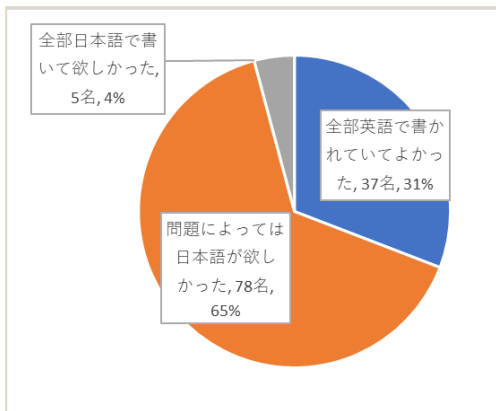


図 11 問題文が英語で書かれていたことについて

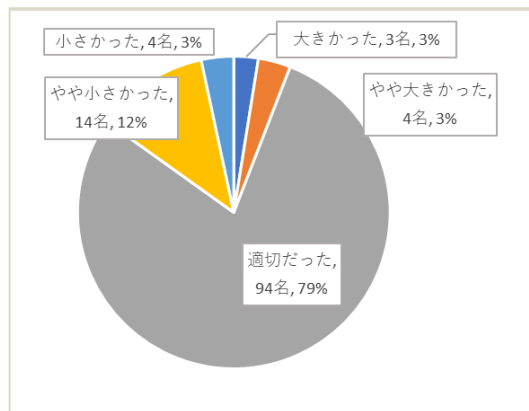


図 12 テキストの文字の大きさ

図 11 は、テキストの問題の指示文が全て英語で書かれていたことについてどう感じたかという点を問うたものである。「問題によっては日本語の指示文が欲しかった」78 名 (65%) が、「全て英語で書かれていてよかった」37 名 (31%) を大きく上回っている。学習内容を「簡単」「やや簡単」とした割合が 46% (図 5) であったにもかかわらず、日本語訳が必要とされたことから、学生が何をもって学習内容を「簡単」であると判断したのか、更なる調査が必要とされる。

図 12 では、テキストの大きさについて尋ねた。様々な教科書の中でも字が小さい方であったが、「適切だった」が 94 名 (79%) であったことから、大部分の学生にとっては特に字の大きさは気にならなかったようである。

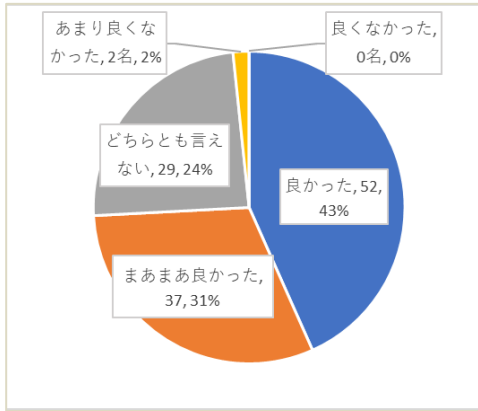


図 13 テキストのカラー写真について

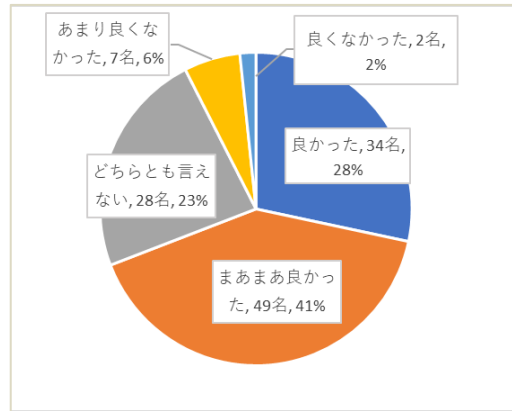


図 14 ビデオ（動画）教材について

図 13 はテキストのカラー写真についてどのように感じたかを尋ねたものである。「良かった」52名（43%）と「まあまあ良かった」37名（31%）で全体の74%となることから、カラー写真付きの教材は学生にとって比較的好評であったことが窺える。また、ビデオ（動画）教材の使用についても「良かった」34名（28%）と「まあまあ良かった」49名（41%）の合計が69%であったことから、こちらも7割方好評であり、大部分の学生にカラー写真、ビデオ教材共に視覚に訴える教材の使用が好評であることが明らかとなった。

### 3.4 授業外での学びや目標に関すること

全25問の質問のうち、質問16から質問25までは授業外での学びや目標等についての項目であった。大学での英語の授業以外で、自主的に英語を勉強しているかの問いに対し、「はい」は33名（28%）に留まり、「いいえ」が86名（72%）となった。（図15）また、「はい」と答えた学生のうち、1週間にどのくらい英語学習に費やしているかという質問に対し、図16にあるように、1日約10分程度と回答した学生は24名（73%）であった。1日約30分程度と合算すると、32名（97%）の学生が約30分以内の英語学習時間となっている。

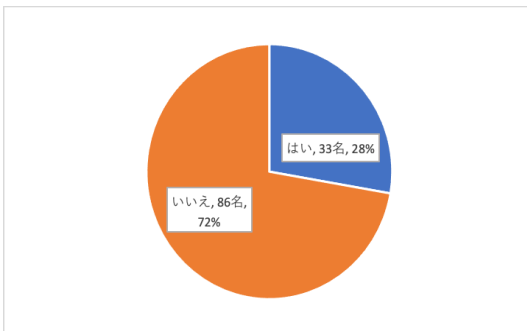


図 15 自主的な英語の勉強について

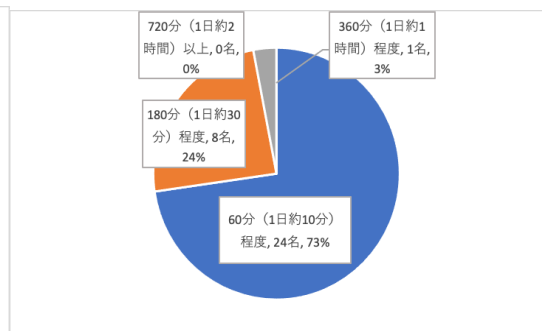


図 16 時間(1週間で)について

図 17 は自主的に英語の勉強をしてみたいですかという質問に対する回答である。「してみたい」が 46 名(53%)であり、「したくない」41 名(47%)を若干上回った。つまり、図 15 に示されていたように自主的な勉強の時間は「いいえ」と回答はしたが、自主的に英語の勉強を「してみたい」という学生が潜在的に存在するということになる。図 18 では「してみたい」を選んだ人に対し、現在、自主的な英語学習をしていない理由を 7 択の中から回答する形式を採った。「その他」を選んだ人はいないため、全ての学生が 7 択のうちの 6 項目のいずれかに当てはまったということになる。学校の授業だけで充分だと思う人の割合は 8%に過ぎず、92%を占めている「時間がないから」「資格取得などの明確な目標がないから」などを選んだ人は何らかのきっかけや動機付けがあれば、英語学習に取り組むさらなる可能性を孕んでいるように見える。特に「何から始めるべきかわからないから」については、何らかの働きかけができれば、英語学習へとつながるのではないかとと思われる。

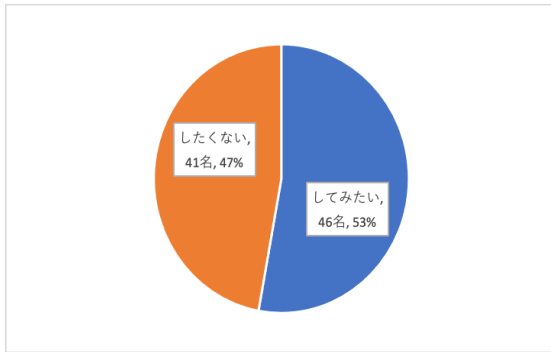


図 17 自主的な英語の勉強について

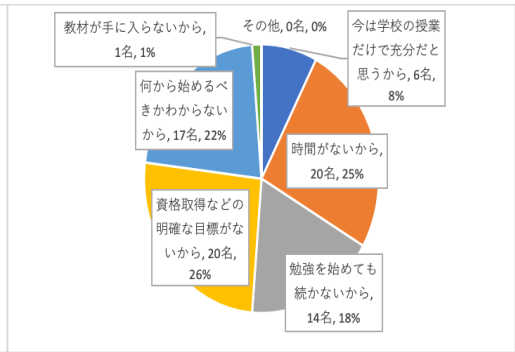


図 18 自主的な英語学習をしていない理由

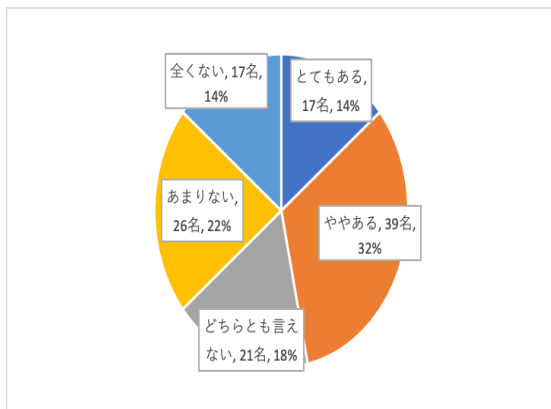


図 19 英語圏への留学への関心について

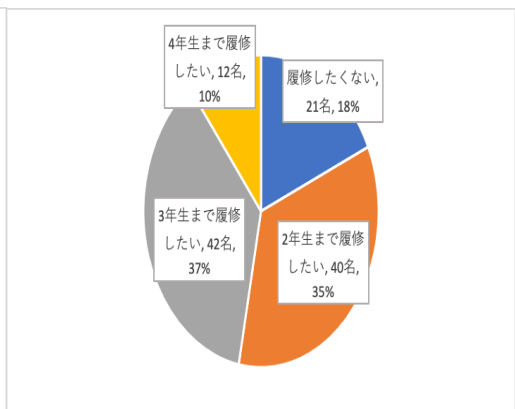


図 20 何年生まで履修したいか

次に、英語圏への留学に対する関心について質問した。その結果が図 19 となっている。「とてもある」と「ややある」を合せると 56 名(46%)に上り、英語圏への留学への関心の高さが円グラフに現れ



ている。同時に「全くない」という人も17名(14%)いた。図20は1年生のみへの質問で、2019年度の時点では必修の英語授業が1年生までとなっているが、その終了後に、英語のクラスがあれば何年生まで履修したいかというものである。回答の選択肢の一つである「履修したくない」は21名(18%)に留まり、94名(82%)という大多数の人が上級生になっても英語授業を受けたいと答えている。「2年生まで履修したい」40名(35%)、「3年生まで履修したい」42名(37%)、「4年生まで履修したい」12名(10%)となっているということは、先述した「自主的な英語学習をしているか」については「いいえ」86名(72%)ではあるものの、「自主的な英語の勉強について」の項目で「してみたい」46名(53%)であったことを鑑みるに、現時点では自主的には英語学習をしていないが、英語を上級生になっても継続的に「履修したい」という人がこのように多くいる。すなわち、大学における英語学習継続の意志が明らかになっている。本学学生は機会さえ与えられれば、学ぶ素地が充分にあるということになるのではないだろうか。

図21は大学の授業を通し、どのレベルまで英語力を高めたいかという質問に対する回答である。「学問上、職業上で英語を用いることができる」を選んだ人が16名(13%)も存在することは注目すべき点の一つではないだろうか。グローバル化した社会の中で、将来、いかなる職へ就いたとしても運用できる英語能力習得を志していることが垣間見えるようである。その他の選択肢「自分に関係のあることは理解できる」36名(30%)、「たいていの事態には英語で対応できる」53名(45%)、「母語話者と普通にやりとりができる」14名(12%)においても、英語学習の重要性を理解しているからこそ、このような選択肢を選ぶのではないだろうかと思われる。つまり、「英語力を高める」ということに対し、学生は少なからず前向き、若しくはかなりの意欲を保持していることになる。

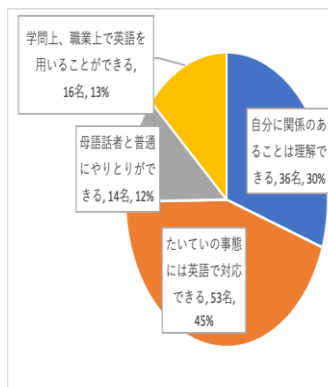


図 21 高めたい英語のレベル

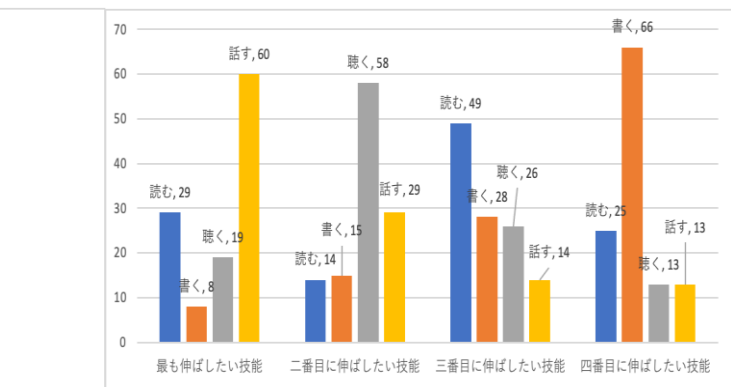


図 22 大学の授業を通して最も伸ばしたい技能

図22は英語の4技能のうち、大学の授業を通して最も伸ばしたい技能から順にa~d「a.読む」「b.書く」「c.聴く」「d.話す」の記号を入れる質問であった。最も伸ばしたい技能は60%を示している「話す」技能であり、二番目は「聴く」の58%、三番目は「読む」の49%、四番目は「書く」の66%となっている。このグラフにおいて最も明らかなことは四番目に伸ばしたい技能として「書く」

を選んだ人が 66%を示しているということであろう。大多数の学生が 4 技能のうち、「書く」は比較的には重要と考えていないようである。つまり、「書く」以外の他の技能である「話す」「聴く」「読む」を重要視する傾向にあると思われる。「話す」「聴く」は特に英会話において必要となる技能であり、多くの学生が英会話の力を伸ばしたいと捉えていることが分かる。先述した図 2 において、「読む」は「得意」が 4 名、「どちらかと言えば得意」が 53 名で全体の 48%を占めていたように、学生の「読む」力は得意な方であるにも関わらず、「話す」では 71 名(59%)が不得意な方であるという認識である。すなわち、「読む」力に必要とされる語彙力や読解力は持っているものの、発信的な「話す」力や、会話や英語ニュースを理解する「聴く」力はやや不得意な方であるため、「話す」「聴く」に重点を置いた英語教育が望まれるということになると想定される。

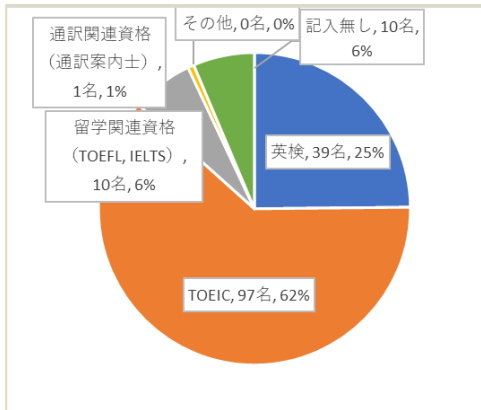


図 23 大学在学中に取得したい英語資格

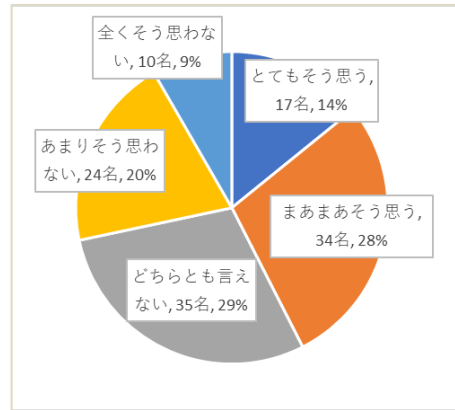


図 24 将来英語を使って生活したいか

図 23 は、大学在学中に取得しておきたい英語資格を複数回答で答えてもらったものである。TOEIC 取得希望者が最も多い 97 名である一方で、英検も 39 名が望んでおり、留学関連資格の取得希望者は 10 名に留まっている。大学の所在地が都市圏ではないため、周辺に TOEIC の受験会場がないことが英検への関心に繋がっているとみることもできる。図 24 の「将来英語を使って生活したいか」の問いには「そう思う」「まあまあそう思う」が 51 名 (42%) であったのに対し、「全くそう思わない」「あまりそう思わない」も 24 名 (29%) であったことから、この両者の意識の違いが授業に向きあう姿勢にも少なからず影響を与えるのではないかと考えられる。

#### 4. まとめ

本稿では、大学 1 年生のこれまでの英語学習状況、授業環境についての満足度、教材についての満足度、授業外での学びや目標について調査した。「これまでの英語学習状況」では、英語という教科に好意的な学生の割合が嫌悪感を示す割合を上回ったものの、英語の 4 技能の得意・不得意については最も得意とされた「読む」とその他の技能（「書く」「聴く」「話す」）との間に大きな溝が生じる結

果となった。また、高校までの成績は良い群、普通、悪かった群がほぼ3者均等に存在しており、半数近くの学生がいずれの英語関連資格も取得してこなかったということが明らかとなった。

「授業環境についての満足度」では、学習内容のレベルはやや簡単、進度や1クラスの人数は適正であったとする意見が最多であった。また、全て英語での授業を望んだ学生は僅か1%で、日本語と英語半々での授業を希望した学生が最も多かった。ペアワークやパソコンルームでの授業については「どちらとも言えない」を選んだ学生が最多であったが、「良かった」と「まあまあ良かった」の合算が上回っていたため、比較的好意的に受け取られていたようである。

「教材についての満足度」の教材については、テキストの文字の大きさが小さくても気にならなかったようだが、問題文が全て英語で書かれていたことに対しては「問題によっては日本語が欲しかった」という声も多かった。一方、テキストに掲載されたカラー写真やビデオ教材など視覚的な面は概ね好評であった。

「授業外での学びや目標」については、約半数の学生が自主的に英語を勉強してみたいと考え、高学年(3, 4年生)までの履修を希望し、大学での到達目標をB1レベルに設定しており、留学に関心を示していることが明らかとなった。一方で、25%の学生がB2レベル以上、30%の学生がA2レベルを到達目標に据えており、回答にばらつきが見られた。4技能のうち最も身につけたい技能は「話す」が最も多く、半数の学生がこれを挙げている。一方で、「書く」技能は最も重要視されていなかった。英語関連資格ではTOEICへの関心が高いが、地理的な理由も関わるためか市内で受験可能な英検にも興味を示されている。将来英語を使って生活したい学生が4割、したくない学生が約3割であり、先述した希望する到達レベルや学習の継続等と同様、将来的な英語に対する意識においても学生間で違いが見られた。

## 5. 今後に向けて

大学入試改革以前の段階で入学した学生を対象に実施したことから、今回の調査では、英語に対する意識の面だけでなく、学生が持つ4技能の間に能力差や顕著な得意・不得意が生じていることが示された。学生が授業内容を「簡単」と評価しつつも、「全て英語による授業」に難しさを感じていたのは、この技能別の能力差が関係していたのではないかと推測される。すなわち、4技能のうちある特定の技能がCEFRのB1レベルに達していたとしても、その他の技能が達しておらず、例えば、文法や「読む」はB1レベルだが、「聴く」がA2で、「話す」がA1といった具合である。調査対象者のそれぞれの技能の高校までの授業時間の差から考えると、当然の結果であると言えるが、テキストの選定時にどの技能とタイアップさせるべきか判断が難しい。「B1レベル」「A2レベル」などといったCEFR準拠の制度設計や教材が本来の力を十分に発揮できるようになるのは、教育改革の成果が発揮され、ある程度4技能が均等に備わった学生が大学に入学する頃になるであろう。それまでは技能別のクラス編成が望まれる。

また、学生間にも、英語の好き嫌い、大学の授業による英語学習の到達目標や将来英語を使って生

活したいかなどに様々な意識の違いが見られた。大学の英語科目では近年、必修カリキュラムの統一化が進んでいるが、学生間の英語に対する意識が異なる中で、1 学年全ての学生に対して、1 つのカリキュラムのもとで同じ到達目標を設定し、同じ教材を用い、同じ教授内容で講義を行うのは、非常に厳しい選択である。今回の調査によって、半数の学生はある程度英語を学び続ける意思を持っていることが明らかになった。学生の到達能力を規格化するのではなく、学生自身が補いたいと願う技能を伸ばし、個人の到達希望レベルに重点を置いた指導方法やクラス編成で対応していく方が学習意欲も保たれるのではないかと考えられる。

また今回の調査では、先行研究と同様<sup>6)</sup>、学生が大学での英語教育で身につけたい技能として「話す(スピーキング)」が最上位に挙げられた。高校までの教育段階だけではなく、大学においても、日本の英語指導がこれまで弱点としてきた技能を国内に居ながらにしていかに伸ばしていくのかを検討すべき時に来ている。このように、学生がコミュニケーション重視の授業を望む背景には、自分たちがこれまで学んだ経験が少ないものをより学びたい<sup>7)</sup> という気持ちと共に、例え英語が苦手な学生であっても、これまで学校で受けてきた形式とは異なる勉強の仕方であれば英語が上達するのではないかと期待も含まれているのではないかと考えられる。但し、基本的な単語や文法事項の習得はいずれにしても必要となるため、大学の授業を変革していく中で、これまでとは違うやり方でこれらの能力をきちんと身につけられるシステムや授業方法、評価方法づくりが求められる。

英語関連資格の取得については多くの学生が関心を示しており、学習のモチベーションにも繋がると考えられることから、学内でのテスト実施など、希望者に対して地理的条件の不利を乗り越える受験環境を大学側が備えていかなければならない。すなわち、学年が進んでも英語学習に対する意欲を維持できるようなカリキュラム、および学習環境の整備<sup>8)</sup>が必要とされている。

今後、大学は現在行われている教育改革によって新たな学習指導要領の下で学び、選抜を経て入学した学生を受け入れていく。現時点での学生のニーズだけでなく、制度改革に対応するために大学の英語教育も大きな転換を迫られるであろう。それをプラスに変え、学生が満足できる授業を進めていくためにも、今回のような調査を頻繁に行い、状況を常に確認していく必要がある。

(3.4 の図 15～22 ミュ-uri、それ以外は大谷が執筆)

#### 《参考文献》

- (1) 太田聡一, 本学学生の英語学習および本学外国語カリキュラムに関する意識—学生アンケート調査からの報告, 東北福祉大学研究紀要, Vol. 38, pp. 175-84 (2014)
- (2) 古家聡, 櫻井千佳子, 英語に関する大学生の意識調査と英語コミュニケーション能力育成についての一考察, 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要, Vol. 4, pp. 29-50 (2014)
- (3) 児島千珠代, 齋藤華子, 共通基礎(英語等の外国語)科目に関するアンケート調査報告—学生の授業に対する意識, 言語教育研究, Vol. 8, pp. 47-75 (2016)
- (4) 屋島哲也, 学生の英語意識調査, 甲子園短期大学紀要, Vol. 38, pp. 35-42 (2020)

- (5) 牧野眞貴, 平野順也, 英語リメディアル教育を必要とする大学生を対象とした英語学習意識調査, 近畿大学教養・外国語教育センター紀要 外国語編, Vol. 6, no. 1, pp. 39-55 (2015)
- (6) 草山学, 吉田広毅, 大学一年次生の海外での学修に対する意識に関する調査研究—英語を専門に学ぶ学生を対象として, 関東学院大学人文学会紀要, no. 140, pp. 1-20 (2019)

《注》

- (1) 文部科学省, 学習指導要領改訂に関するスケジュール, [https://www.mext.go.jp/content/1421692\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1421692_3.pdf), 2021年1月28日閲覧
- (2) 文部科学省, 幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント, [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1384661.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm), 2021年1月28日閲覧
- (3) 文部科学省, 高等学校学習指導要領の改訂のポイント, [https://www.mext.go.jp/content/1421692\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1421692_2.pdf), 2021年1月28日閲覧
- (4) 大学入試センター, 受験案内, [https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/shiken\\_jouhou/jukenannai\\_gazo.html](https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/shiken_jouhou/jukenannai_gazo.html), 2021年1月28日閲覧
- (5) 大学入試センター, 大学入試英語成績提供システム, [https://www.dnc.ac.jp/eigo\\_seiseki\\_system/index.html](https://www.dnc.ac.jp/eigo_seiseki_system/index.html), 2021年1月28日閲覧
- (6) 前述, 古家, 櫻井 (2014), 牧野, 平野 (2015), 屋島 (2020)
- (7) 前述, 牧野, 平野 (2015)
- (8) 前述, 太田 (2014)